

小学校 5 年国語科

「登場人物の手記を書こう」

教材：『大造じいさんとがん』（教出 5 年上）（全 11 時間）

授業者 真田 武知

実践のポイント

本教材は、四つの場面で構成されており、各場面には4年間にわたる大造じいさんと残雪の戦いが1年ごとに描かれています。一つずつの出来事が詳細に描かれ、年ごとの出来事を積み上げていくという形式で物語が展開されるために、時間の経過がつかみやすく、話の展開がわかりやすい構成になっています。

また、大造じいさんの心理を描き出す細かな行動描写や秋の空や日の光を中心とした情景描写、仲間を助けるために戦う残雪の巧みな描写は、子供たちを物語の世界に引き込んでいきます。

こうした構成や描写に着目して読み進めることで、子供たちは登場人物の人物像や相互関係、心情の変化を読み取ることができると考えました。また、登場人物の心情の変化について自分の考えをもち、友達と交流し合うことで、読みを深めることができると考えました。

本実践を通して、子供たちが見通しをもって主体的に学ぶことができるようにすること、さらに友達と対話しながら自分の考えを広げることができるようにすることを考えました。そのために「学びのゴールとなる学習活動」を設定しようと考えました。

授業のねらいと展開



図1 友達と手記を交流している様子

実践のポイントを考慮して、「学びのゴールとなる学習活動」を「登場人物の手記を書こう」としました。これは、物語の中にちりばめられた登場人物の行動描写や情景描写に着目し、登場人物の心情を読み取り、登場人物の心情に共感して手記を書く活動です。

学びのゴールとなる活動を支えるのが、教材文「大造じいさんとがん」を用いて「ゴールとなる学習活動」を行う第2次となります。第2次では、左の写真のように、書いた手記を交流したり、読み取ったことを交流したりして、考えを広げたり深めたりしました。

第3次では、第2次の学習活動を生かし、自分で選んだ本の登場人物になりきって手記を書きます。本実践のねらいを達成するために、この「大造じいさんとがん」での学習経験が、そのまま「学びのゴールとなる学習活動」の学びにおいて、身に付けた資質・能力を発揮できるように単元を構成しました。

視点1：資質・能力の育成を支える「学びの文脈」

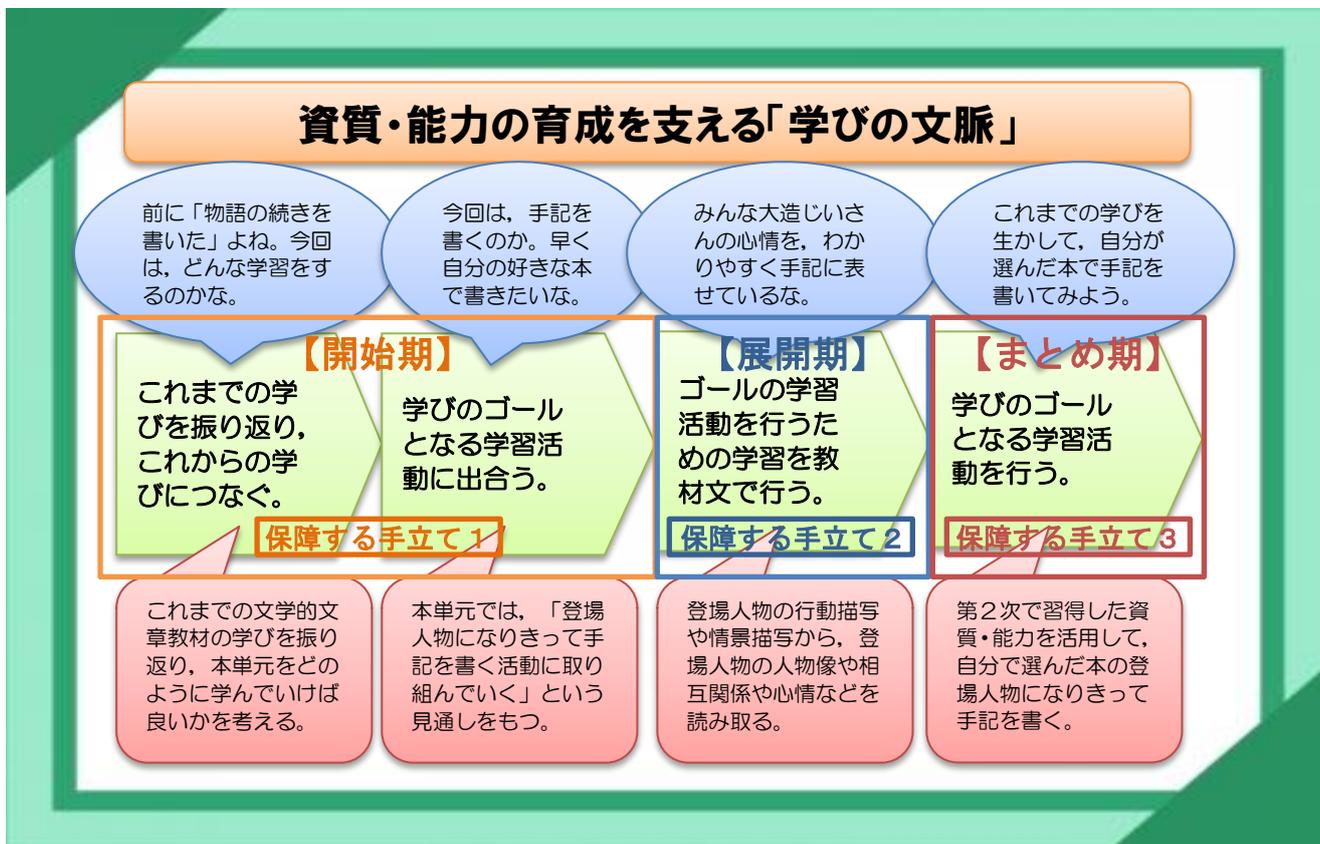


図2 本実践における「学びの文脈」のイメージ

第1次では、既習の文学的文章教材での学びを振り返り、どのような教材をどのように学び、どのような資質・能力を身に付けてきたのかを確認しました。その後、本単元では登場人物の心情や相互関係などを読み取り、それを表現するためには、どのようなゴールを位置付けたらよいかを考えました。

子供から、「登場人物になりきって心情を表現する方法として日記がいいのではないか」という意見が出たところで、「日記も良いが、手記はどうか」と提案しました。「手記は、登場人物が経験した出来事とそのときの気持ちを表現したもので、ブログのようなものです。」と説明すると、子供は「やってみよう！」となりました。そこで、「登場人物の手記を書こう」という学びのゴールを設定しました。

手記を書く条件は「①登場人物が経験した出来事を書くこと」「②登場人物が出来事を通して思ったこと(心情)を書くこと」の2点です。「大造じいさんとがん」は、大造じいさんが経験した出来事が詳細に書かれ、行動描写や情景描写から心情も読み取りやすいので、手記を書くのに適した教材です。学びのゴール設定後、ゴールに向かい「どのような学習が必要か」、「どのように学習を進めていくか」などを子供たちと一緒に考え学習計画を立てて、見通しをもちました。

第2次では、場面ごとに、大造じいさんと残雪の戦いの様子、大造じいさんの心情、残雪への思いを読み取る学習を行いました。子供は、手記を書くという目的をもち、登場人物の行動描写や情景描写に着目して、登場人物の人物像や相互関係や心情などを読み取ります。そして、読み取ったことや考えたことを交流します。第2次の学習を通して、育成すべき資質・能力である「物語の中の言葉や物語の展開などについて理解する。」

「登場人物の行動描写や情景描写から、登場人物の人物像や相互関係や心情などを読み取る。」「物語を読んでまとめた考えや感想を交流し、自分の考えを広げようとする。」を身に付けていくことができると考えました。子供たちは、描写に着目して、大造じいさんの心情を読み取ることができました。読み取った後には、読み取りを生かして、大造じいさんになりきって手記を書こうとする姿が見られました。学習を進めていく中で、「友達の手記を読んでみたい。」「書いた手記を交流したい。」という声が聞かれました。友達との交流を通して、意欲的に自分が書いた手記を加筆修正する姿も見られました。

第3次では、子供が好きな本を選んで、登場人物の手記を書く「ゴールとなる学習活動」です。子供たちは、本を選び、出来事と登場人物の心情を読み取り、手記を書きます。早く書き終わった子供から自由に交流し、全員が書き終わったら、班で交流しました。その後、他の班の人にも紹介したい手記を1つ決め、全体で発表しました。全体で発表する際に、手記をただ読むのではなく、実物投影機を使い、見せながら発表しました。互いの手記を見合い、感想を伝え合ったり、コメントを書いたりする姿が見られました。最後に、改めて自分の手記を見直し、本単元を終えました。

第2次で身に付けた力を発揮するとともに、「選書する力」や「感想を伝え合ったりする力」などの資質・能力も育むことができました。学びの文脈を構築することで、第1次で高まった意欲を持続させながら単元を通して学び続け、資質・能力を身に付けていく子供の姿を見ることができました。

視点2：主体的・対話的で深い学びを保障する手立て

【手立て1】 学習の見通しをもつことができるよう、「登場人物の手記」を書くという言語活動を位置付ける



図3 本実践における主体的な学びを実現する手立てのイメージ

「登場人物の手記を書く」という、「ゴールとしての学習活動」を位置付けることで、子供は登場人物の行動描写や情景描写に着目して、登場人物の人物像や相互関係や心情などを読み取り、それを手記に表すことに

なります。子供たちは、読み取った大造じいさんの残雪への思いなどを大造じいさんになりきって自分なりに表現していました。また「自分の手記をよくするために、友達の書いた手記を読んでみたい。」「自分の書いた手記を読んでもらい、アドバイスがほしい。」「自分の手記に対する、友達の感想を聞きたい。」などと、友達の協力を得たり、友達と一緒に学んだりしながら学習を進めることができました。



図4 手記を書いている様子

さらに、学びのゴール設定後、ゴールに向かい「どのような学習が必要か」、「どのように学習を進めていくか」などを子供たちと一緒に考え学習計画を立てて、学習の見通しをもちました。学習の進め方がわかると、子供たちは自ら進んで学習を進めることができました。

子供たちから「Aさんの『待ってるよ、残雪!』という表現の仕方が上手。」「Bさんの手記は、『次こそは撃ってやる。』など、大造じいさんが話した言葉も書いていてわかりやすい。」「友達と手記を交流したら、書き直したくなった。」などの声や「早く自分の好きな本で手記を書いてみたい。」という声を聞くことができました。また、友達との手記の交流や全体での交流を受けて、粘り強く手記を加筆修正する姿を見ることができました。

【手立て2】 育成すべき資質・能力を育成するために、班や全体で交流する場面を位置付ける

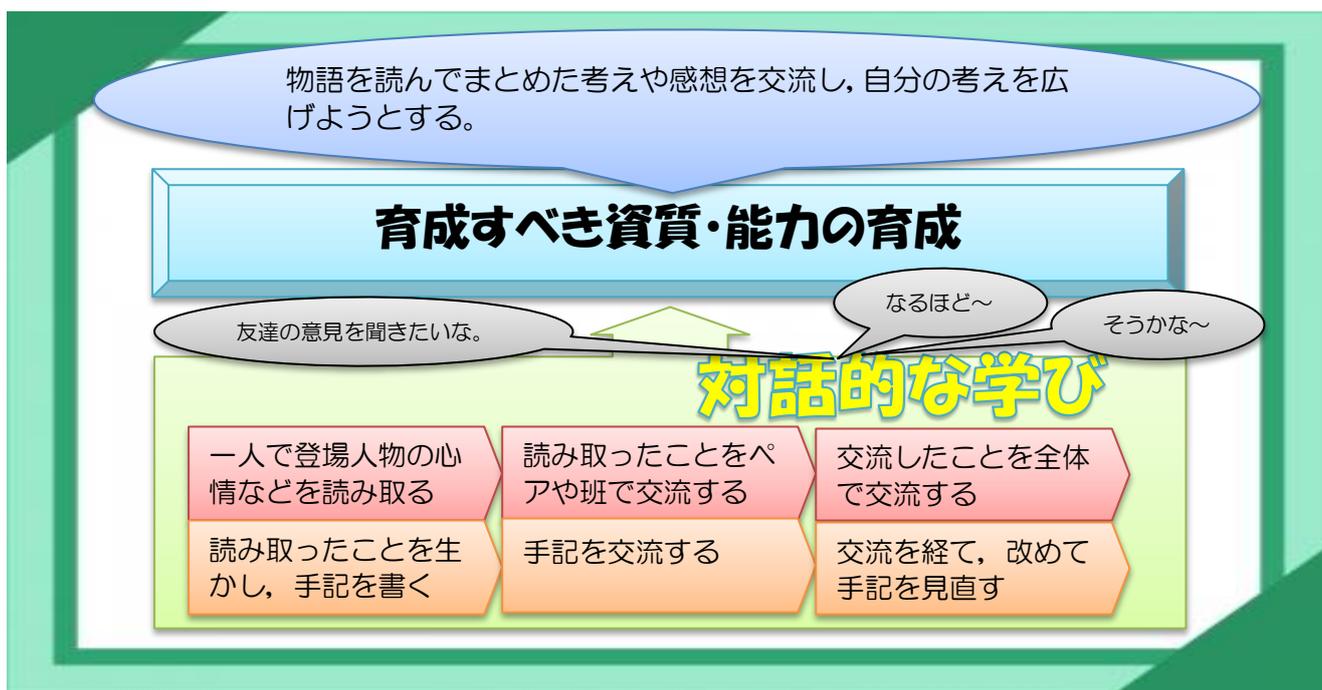


図5 本実践における対話的な学びのイメージ

一人で読み取った登場人物の心情や相互関係、出来事などをペアや班で交流し、さらに全体で交流することで読みを広げたり深めたりすることができました。

「Cさんが『大造じいさんは、がんをとるしかけを作るのに、相当な時間をかけている。』と話しているのを聞いて、改めて大造じいさんのすごさに気付いた。」



写真6 ペアで交流する様子

「大造じいさんが残雪を撃たなかったのは、仲間を助けたからだと思っていたけど、みんなの意見を聞いて、残雪のいかにも頭領らしい態度に心を打たれたから撃たなかったんだという考えに変わった。」などの声を聞くことができました。

また、読み取ったことを生かして手記を書き、手記を交流することで、自分の手記と友達の手記との共通点や相違点に気付き、表現の幅を広げることもできていました。

【手立て3】 能率よく多様な表現に触れるためにICTを活用する

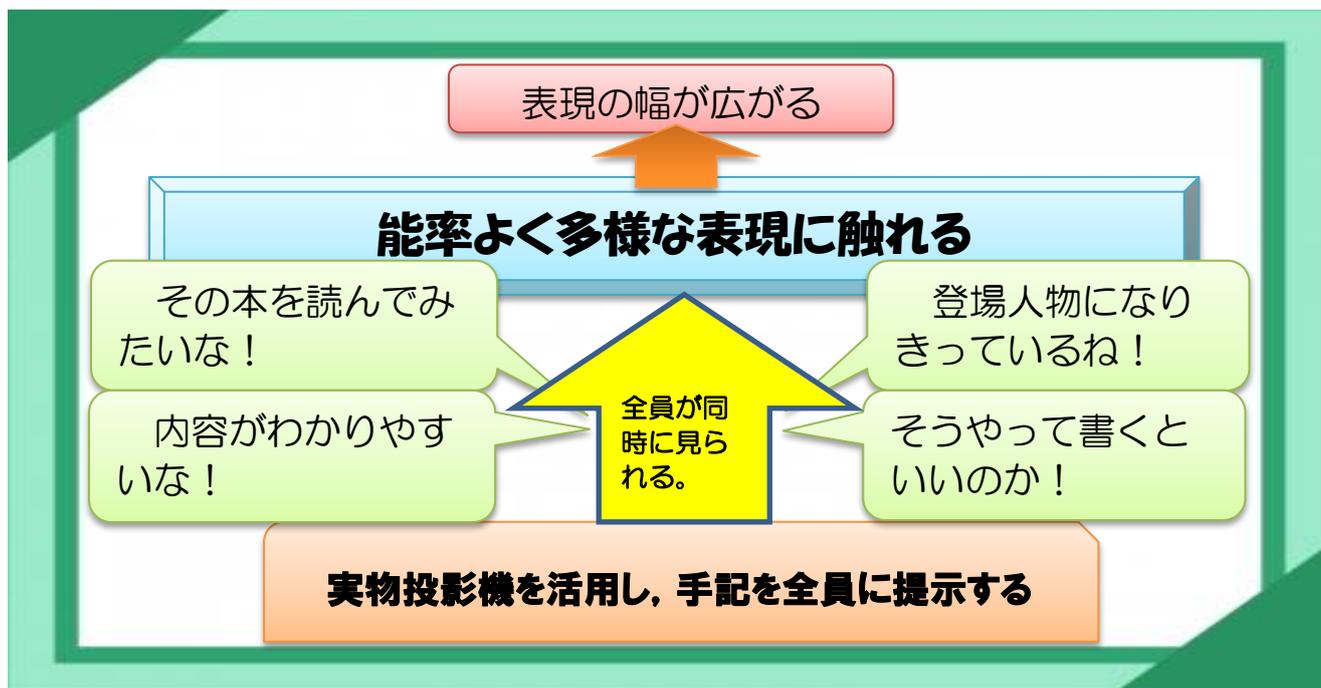


図7 本実践における多様な表現に触れるための手立てのイメージ

第3次で、子供が自分で選んだ本の登場人物の手記を交流する際に、右の写真のように実物投影機を活用しました。実物投影機を活用することで、手記の内容を聞き取るだけでなく、読み取ることができるので、内容が捉えやすくなりました。また、能率よく多様な表現に触れることができ、表現の幅を広げることにつながりました。第2次でも、実物投影機を活用していれば、より効果的に手記を交流することができたと思います。

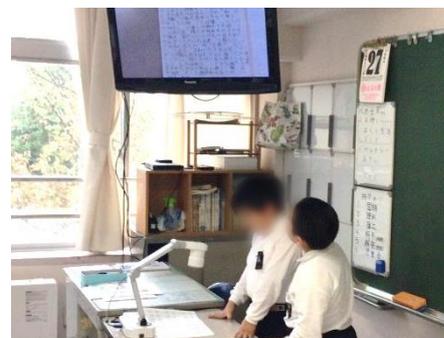


図8 実物投影機を活用して手記を発表している様子

授業者からのコメント

「学びの必然性」を作り出すために

今年度の教育研究大会の事後討議で「子供が主体的に学ぶには、学びの必然性をいかに作り出すかが大事である。」というご意見をいただきました。本実践では、子供が主体的に学ぶための手立てとして、「登場人物の手記を書くという学びのゴールとなる学習活動」と「学習計画を子供と考えること」を設定しました。登場人物の手記を書くという活動は、本単元の目標達成につながる活動であり、教師にとっては学びの必然性があ

ります。

また、子供たちは、これまでに取り組んだことがない「登場人物の手記」を書くという言語活動に興味を示しました。大造じいさんになりきって、意欲的に手記を書くことができていましたし、単元全体の見通しをもち、学習に取り組めていました。第3次の「自分の選んだ本」の登場人物の手記を書くことに対して、興味関心を高めていました。

しかし、子供にとっては学びの必然性は、十分ではなかったかもしれません。「育成したい資質・能力」と「子供の学びたいこと」に距離があると、子供は学びに切実感を持ってないだろうと思います。

子供が学びの必然性を感じるようにするには、「**学びのゴールとなる学習活動の工夫**」が必要だと考えます。「なぜ学びのゴールとなる学習活動がこれなのか」ということが、子供の中で腑に落ちれば、子供たちは主体的に学びに向かうことができます。そのためには、**子供が切実感をもてる言語活動を学びのゴールとなる学習活動にすることが有効**です。



図9 桐の子発表会で音楽劇「雪わたり」を
発表している様子

例えば、図9のようにこれから学習発表会で劇発表がある。そのために、「雪わたり」を教材にして、劇発表を学びのゴールとなる学習活動とする。

学校の図書室の利用者が少ないので、利用者を増やしたい。そこで、「雪わたり」を教材にして、ポップづくりを学びのゴールとなる学習活動にするなど。

今後は、「**育成したい資質・能力が子供の学びたいこと**」になっていて、子供が学びの必然性を十分に感じられるような授業を目指して研究していきたいです。

必要感のある対話を生み出すために

今年度の教育研究大会の事後討議で「対話的な学びを深い学びにつなげるためには、子供が対話をする必然性を実感することが大事である。」というご意見をいただきました。確かに、子供が「友達の考えを聞きたい」「友達と交流したい」という思いをもったときに、対話の場を設定することが、学びの質の高まりにつながります。今後はこれまで以上に、授業づくりの際に「どのような課題・発問・展開が子供の『交流したい!』という思いを引き出せるかを考えていきたいです。

例えば、

- ・「多様な答えが出るような課題」

→「大造じいさんは、なぜ残雪を撃たなかったのだろうか。」

「残雪は、再び大造じいさんのところにやってくるだろうか。」

「この物語が続くとしたら、どのような展開になるだろうか。」 など

上記のような課題を提示します。そして、子供から「先生、友達の考えが聞きたい。」「友達と相談したい。」という声を引き出します。

それで終わりではなく、交流したことについて「振り返る」ことが大切です。

T 「友達と交流してどうだった。」

C1 「友達の考えを聞くまでは、大造じいさんが残雪を撃たなかった理由がわからなかったけど、友達の意見を聞いて、残雪のいかにも頭領らしい態度に心を打たれたから撃たなかったんだということがわかった。」

友達と交流したことで、一人では解決できなかったことが、解決できた。

C2 「大造じいさんが残雪を撃たなかったのは、残雪が仲間を助けたからだと思っていたけど、友達の考えを聞いて、残雪のいかにも頭領らしい態度に心を打たれたから撃たなかったんだという考えが変わった。」

自分と異なる考えに出会い、考えが変容した。

C3 「Dさんが、大造じいさんが話した言葉や行動描写だけでなく、情景描写からも心情を読み取っていたので、自分もその視点で改めて読んでみた。すると、より大造じいさんの心情が読み取ることができた。」

新しい読みの視点に出会い、読みが深まった。

上記のように、子供自身が対話のよさを言語化することで、「対話することの価値」を実感できるようになります。

このような学びの繰り返しが、国語科で育成すべき資質・能力を身に付けた子供を育てることにつながると考えます。